第１節　水源の森コミュニケーションの背景

水道局では、水道事業に関する理解を広く深めていただくとともに、信頼され親しまれる水道を目指して、様々な広報活動を行っています。水源林においても、前計画から「水源地における交流・連携」を開始し、水源林に関する情報発信や多様な主体と連携した森づくりを実施してきました。この間、多摩川水源森林隊や水源林ふれあいウォークなどを通じてボランティアや都民を始めとする多くの方々に水源地に訪れていただき、好評を得ています。

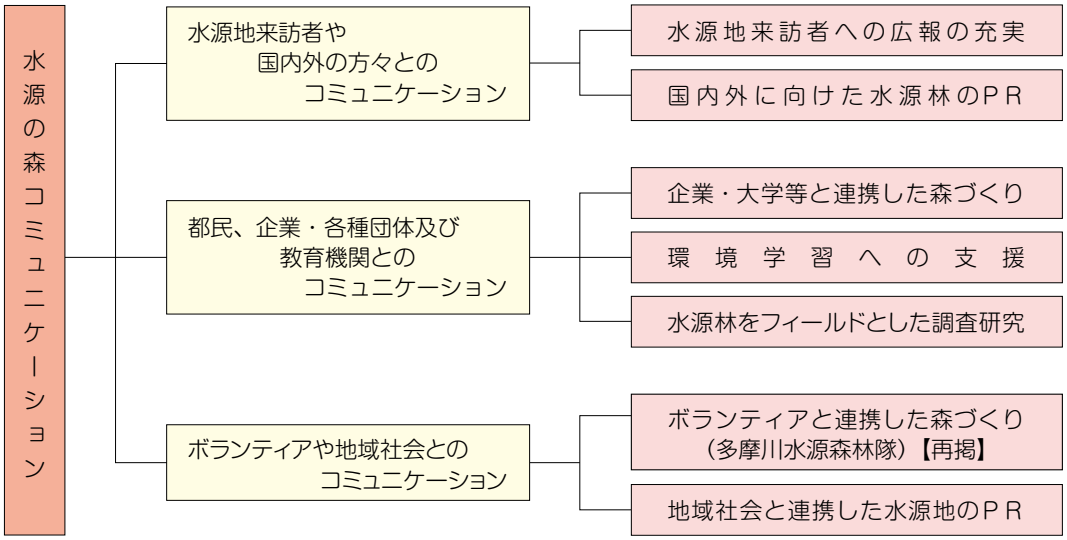
しかし、水源地保全の取組に対する認知度は、いまだ高いとは言えない状況にあります。

このことから、前計画まで行ってきた交流・連携事業をより進化させ、新たに「水源の森コミュニケーション」と位置付け、水源地を通じて、より積極的に多様な主体とのコミュニケーションを図っていきます。これにより、水道局が行ってきた水源地保全の取組を多くの方々に知っていただくとともに、豊かな水を育む森づくりなどに多様な主体と協同して取り組むことで親しまれる水源地を実現し、安全でおいしい水づくりへの理解につなげていきます。

水源地を通じた社会とのコミュニケーション

第２節　水源の森コミュニケーションの概要

水源の森コミュニケーションでは、水源林に関する情報発信を充実させるとともに、多くの方々に水源地を訪れていただく施策や森づくりを体験する施策などを一層強化していきます。



第３節　水源地来訪者や国内外の方々とのコミュニケーション

１　水源地来訪者への広報の充実

これまで、水源林内に整備した散策路である「水源地ふれあいのみち」を活用して「水源林ふれあいウォーク」を開催してきました。

今後も、より多くの方々に水源林への理解を深めていただくため、水源林ふれあいウォークを継続して実施するなど、多くの方々が水源地に来訪できる機会を創出します。

水源林ふれあいウォーク

また、小河内貯水池南岸に整備されている全長約12kmの散策路である「奥多摩湖いこいの路」からアクセスでき、小河内ダム、奥多摩湖及びそれを取り巻く水源林を一望できる佐須沢山周辺のエリアを新たな広報施設（水源地モデル林）として位置付け、来訪者に水道事業における森林管理の必要性を理解していただくため、案内や散策に適した歩道及び説明看板等の整備を実施します。

２　国内外に向けた水源林のPR

環境問題に対する社会的な関心が高まり森林への注目が集まる中、水源地を訪れることが難しい方々、水源地や森林と関わることが少ない方々も多くいらっしゃいます。

このような方々にも水源林に対する理解を深めていただくとともに親しみを感じていただけるよう、水源林PRイベントの開催や水源林の間伐材を用いたグッズ類の配布など、各種PR施策を実施します。

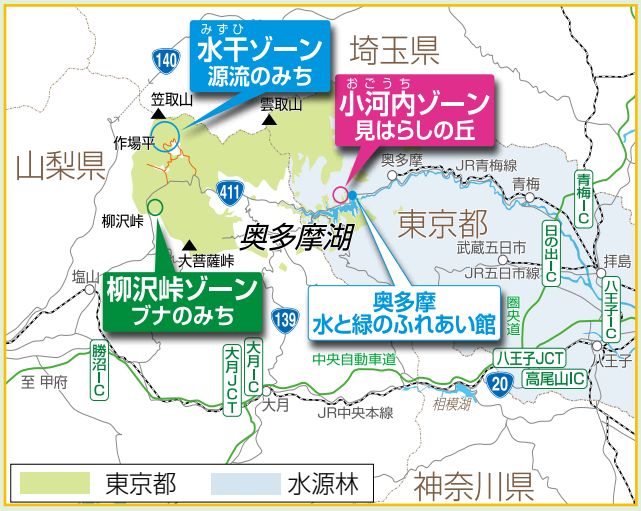
また、平成30（2018）年の国際水協会（IWA）世界会議や平成32（2020）年の東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会など、東京で大きな会議やイベントが開催される機会を捉え、東京を訪れる国内外の多くの方々に水源林の取組を知っていただけるよう、広く情報を発信していきます。

水源林PRイベント

間伐材を用いたグッズ

コラム 6　～ 水源林ふれあいウォーク ～

水道局では、都民を始めとした多くの方々に水源林を訪れていただき、森林の働きと環境保全の大切さを理解していただくため、水源林内に「水源地ふれあいのみち」と名付けた散策路を３ゾーン整備しています。



小河内ゾーン ～見はらしの丘～
（小河内貯水池の眺望を満喫できるコース）

平成18年度から、水源地ふれあいのみちの柳沢峠ゾーンと水干ゾーンを活用し、職員が直接お客さまに水源林を案内する「水源林ふれあいウォーク」を実施しています。これまでに、計29回実施し、延べ905名の方に参加していただきました。

水干ゾーン ～源流のみち～
（多摩川源流の水干を探訪できるコース）

水源林ふれあいウォークでは、森林を散策しながら、水を育む水源林の働きや役割、樹木の名前や特徴、水源林の管理などについて、職員が説明を行うとともに、樹皮や葉の香りを嗅ぐ、沢の水に触れるなどの様々な自然体験を実施しています。

参加者の方々からは「説明が分かりやすく、水源林の重要性が分かった。」、「水道水を飲める幸せを実感できた。」といった感想を頂くなど大変好評を得ています。

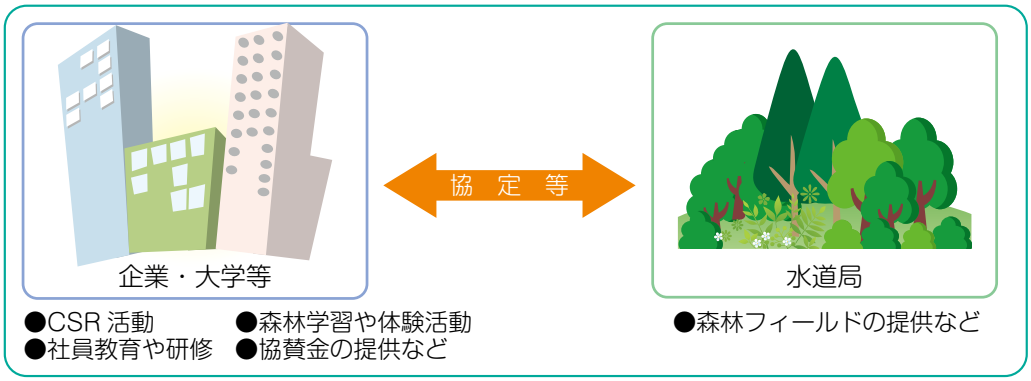
柳沢峠ゾーン ～ブナのみち～
（ブナなどの天然林内を散策できるコース）

第４節　都民、企業・各種団体及び教育機関とのコミュニケーション

１　企業・大学等と連携した森づくり

近年の環境意識の高まりから、企業や大学、NPOなどにおける環境保全活動が活発になってきています。特に、CSR（企業の社会的責任）活動の一環として、企業の職員が森林内で植栽や間伐作業を体験するなどの森づくり活動が各地で実施されています。

こうした状況を踏まえ、購入した民有林を含む水源林において、これまで水道局主体で行ってきた森づくりに加え、都民や企業、大学などの多様な主体と連携し、地元自治体や森林組合等とも協力しながら、間伐や枝打といった森林保全活動を行うなど、様々な手法を活用した森づくりへ進化させ、平成29年度から試行を進めて、本格実施に向けた環境整備を行います。この取組により、多くの方々に水源地保全の取組について、より一層理解を深めていただき、安全でおいしい水づくりへの理解につなげていきます。



連携による森づくりのイメージ

２　環境学習への支援

これまで、小学校で行う水源地や環境をテーマにした学習の支援を通して、水源林の役割や大切さについて理解を深めてもらうため、小学４年生を対象とした学習支援教材を作成し、希望する学校へ配布してきました。また、職員が直接学校へ赴き、水源林に関する講義を行う水道教室も実施してきました。

今後も、これらの取組を継続して実施するとともに、水源林をフィールドとした課外学習を誘致するなど、より積極的な支援を行います。

学習支援教材

水道教室

さらに、高校生や大学生を対象とした水源地での森林保全活動体験などの施策を充実させ、より多くの方々に水源地保全の取組を理解していただくことを目指します。

小学生への水源林の説明

高校生による森林保全活動体験

３　水源林をフィールドとした調査研究

水源かん養機能など水源林の持つ多面的な機能の定量化（見える化）が実現すれば、多くの方々に水源林が果たしている役割をより分かりやすく伝えることができます。

このため、大学などの研究機関と連携して水源林の持つ機能の定量化を図るなど、水源林をフィールドとした調査研究を実施します。

また、調査研究の成果は、今後の水源林のより良い管理にも活用していきます。

水源林をフィールドとした調査例

第５節　ボランティアや地域社会とのコミュニケーション

１　ボランティアと連携した森づくり（多摩川水源森林隊）【再掲】

多摩川水源森林隊は、多摩川上流域で林業の不振などにより手入れが行き届かない民有地の人工林を、ボランティアの方々の手で水源地にふさわしい緑豊かな森林に再生することを目的に、平成14年７月に設立されました。

より多くの方々に活動を知っていただき、参加していただけるよう、積極的に情報発信を行いながら、継続的に活動を実施していきます。

２　地域社会と連携した水源地のＰＲ

これまで、多摩川水系上下流交流会の実施や地元自治体主催のイベントへのブース出展などにより、水源地域と連携しながら水源林のPRを行ってきました。

今後も、水源地域との連携を一層深め、地域の方々と協力しながら水源地のPRを行います。

ブース出展の様子

コラム７　～ 多摩川水系上下流交流会 ～

多摩川水系上下流交流会は、多摩川上流域の豊かな自然を守る方々と中下流域で水を使用する方々とが親しく交流することを通して、水源地域の役割や大切さについて参加者の方々に理解を深めていただくことを目的とし、平成14年度から実施している取組です。

間伐材を使ったスプーン作り体験

交流会では、水源林内の散策や水源地である奥多摩町、丹波山村及び小菅村の方々と交流を深めながら郷土料理や伝統工芸品を作る体験などを行っており、水源地保全の取組について理解を深めていただくとともに、地域の活性化にも貢献しています。

これまでの参加者は延べ400名を超え、「水について真剣に考える貴重な体験ができた。」、「水道から出てくる水に感謝の気持ちが芽生えた。」といった感想を頂くなど、大変好評を得ています。